
そのときちょっと頭が残念だった人たちの、みっつのお話

ほたるゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そのときちよつと頭が残念だった人たちの、みつつのお話

【Nコード】

N4309G

【作者名】

ほたるゆき

【あらすじ】

ちよつと理解のズレがあったり、計算ミスをしてしまった人たちのみつつのお話です

1 / 乱暴な天子

まだほが痛い。しかしそれよりもずっと、心が痛い。理由がわからないという気持ち悪さが、余計にわたしにへばりついた痛みを手伝う。

なぜわたしは、総領娘様に殴られたのだろう。

あれは本当にとつぜんだった。飲み物がほしいと総領娘様が言ったので、好きなジュースを渡そうと近づいたらいきなり、ぱん、とそのときの顔は真剣そのもので、叩いたのが冗談ではないことが聞かなくてもわかった。

2

このジュースはお嫌いでしたか？
そんなんじゃないよ。

「じゃあなぜです」と聞き返したけれど、総領娘様は「わかるですよ、そのくらい」と言って、教えてくれなかった。

なぜだろう。何かわるいことをしたのだろうか。
いや していない。そんなつもりはないはずだ。なら、言ったことが悪かったのだろうか。何かわたしは言った？

……言っていない。
ということは、ついに嫌われてしまった、ということかな。
口うるさすぎたからだろうか。でもそれは総領娘様のため
い

や、嫌われても仕方がないか。

叱るほうの思いが叱られるほうに届くなんて、そうそうない。あととしてもかなりの時間が必要なはず。

でも、わたしがあの方に対して口うるさかったのは昔からのことだ。何でいまさら？ それとも信じにくいけどあのかたは前から我慢していて、今になって我慢が切れたのだろうか。反抗期？

でも、まだ納得はできない。違和感がある。

ネガティブのほうに考えすぎた。

何か、総領娘様はわたしを殴らないといけない理由があったんじゃないか。

じゃあ、なんで？ …… 誰かに脅されて？

総領娘様の暴力が信じられず、わたしの考えは総領娘様が殴らなければいけなくなった理由について、考えるようになった。

そしてついに。ひとつの考えが浮かんできた。しかしその考えは、確信するには十分すぎた。

ああなんだ、大したことじゃないじゃないか。ちゃんと、帰って正しい意味を教えればいいだけのこと。

わたしは昨日、総領娘様にこう言ったんだった。

「総領娘様、感謝の気持ちをあらわすときは、自分がされてうれしいことを相手にしてあげるのもいいと思いますよ」

「お、お、お、お嬢様！」

「どうした美鈴」

「お、お嬢様からいただいた宝くじが……いい、いい、一億当たってました！」

「一億？ ああ、いいわ。取っておきなさい」

「ほ、ホントですか！？」

「ええ、あげるわ」

「あ、ありがとうございます！」

そう言って美鈴は、一礼して門へと戻っていく。レミリアの耳には美鈴のやたらと大きい歌が聞こえていたものの、今回だけは許してあげることにした。

だんだんと美鈴の声が聞こえなくなったところ、入れ替わりで、咲夜がレミリアのもとへとやってきた。

「どうなさったんですか、美鈴が踊りながら出て行きましたが」

「ああ、当たりの宝くじをあげたのよ。一億ですって」

「一億！？」

「何よ一億くらいであなたも美鈴も」

「い、一億ってお嬢様……お嬢様が毎晩おいしそうに召し上がりになるあのアイス、一日よつつ召し上がっても四十年ぶんはかたんに買える額ですよ！」

「すぐ取り返しなさい！」

八雲家三人で花火を見に行こうと思い、堤防にやってきた。角度が急な堤防で寝転びながら花火を見ていた橙は眠ってしまい、そっちに氣をとられているうちに、体育座りのようにひざを抱えていた紫様も寝てしまった。

橙はあとで起こせばいい。それより紫様だ。そんな格好で寝ていたら起きたときに体が痛いにちがいない。

「紫様紫様、花火を見なくていいんですか」

声をかけても起きないのがいつものことだから、指で紫様の肩をつつく。それでも起きない。

「ゆ・か・り・さ・ま！」

さっきよりも強くつつく。気のせいだろうか、体がかたむいたような気がする。軽く反応したのだろうか。

このくらいにしておくべきだった。つねに数式を頭の端っこに置いている私だけど、今日だけは花火に氣をとられて数式は留守だった。

まさか、このタイミングで計算ミスをするとは。

つつかれた紫様の体が、おおきくぐらりとかたむいた。それは、スローモーションにみえた。

「あれ？」と思う前に紫様は前のめりに、さらに前のめりになり、ついにごろつと前回りした。

「やらかした！」と思ったころには、すでに手の届かないところにいて、さらに遠ざかっていく。だんだんと前回りの速度も上がって

きた。

こんなときでも、まっすぐ転がっていく主人に感心する。

一直線上を転がる紫様はボーリングのように、川岸に生えていたアシの集団を踏み倒し、やがて見えなくなった。

すこしおくれで、ドボーンというすごい音が聞こえた。

（後書き）

ちょっと蓮子のほうの話が時間かかりそうなので、つなぎとしてこれを投稿なのです。これはいいたいなんでしょう……。

さて、読んでくださってありがとうございました。また！。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4309g/>

そのときちょっと頭が残念だった人たちの、みつつのお話

2010年10月25日08時34分発行